

「子どもの生活に関するアンケート調査」の結果概要

研究開発室

—目次—

1. 調査の背景と目的	36
2. 調査の概要	37
3. 学校教育と非教科教育に対する親子の認識	38
4. 子どもの学外における「学び」を支える環境と母親の就労	40
5. 子どもからみた父親・母親のかかわり方	42
6. 小中学生の放課後の過ごし方と親の友人ネットワーク	44
7. 子どもの悩みと病気の対処	46
8. 子育て、消費・余暇をめぐる世代間関係	48
9. 子どもにとっての自宅の安全性	50

1. 調査の背景と目的

近年、教育や学校をめぐる問題が社会をにぎわせている。子どもの学力低下や学習意欲の低下、その背景にあるゆとり教育による学校の教育力低下の話は、その一例である。学校教育をめぐっては、国語算数等の既存の科目を教えるのみでは変化する社会や労働市場に対応できる能力を子どもが身につけることは難しくなっており、職業教育や情報教育等が必要であることが指摘されている。また、子どもの学力低下の背景には、親の子育て力、教育力の低下があるとされる。こうした状況に対処するために、教育改革がすすめられ、さまざまな子どもの学力向上策等が検討されてきた。

しかし、このように指摘される問題には、客観的に現状が把握されていないものもある。例えば、学校の教育力が問題視されるが、そこで学んでいる子どもやその親はどのように状況を考えているのだろうか。親の子育て力、教育力の低下があるといわれるが、そこまで親は子どもの養育や教育へのかかわりをしていないのだろうか。

また、視野を広げて子どもの育ちを支える家族や周囲の環境に目を向ければ、子どもおよび子育てをとりまくさまざまな問題もみえてくる。例えば、放課後、小中学生はどのように過ごしているだろうか。学校と親子が問題にされることが多いが、彼らを支えるはずの地域社会、親族、さらに社会の子育て支援はどうなっているだろうか。いまだきの子育て環境は安全なのだろうか。こうした広い意味での教育や子育てをめぐるさまざまな状況を把握した上で、現状への対処方法を再検討する必要があるのではないだろうか。

こうした問題意識から、当研究所は、子どもの教育や生活の現状を把握するために、「子どもの生活に関するアンケート調査」を実施した。子育てや教育の問題が議論される中、当事者である父母や子どもがみている現状や評価を聞くことが重要であると考えたからである。調査項目は、学校教育の評価、教師と子どもの関係、親が子どもと向き合う時間、放課後の過ごし方、祖父母と親子の交流、親子での外出等、多岐にわたっている。

本号では、この調査結果の一部を速報する。親子の属性によるこれらの調査項目の回答結果の違いや各項目間の関係等の詳細な分析もすすめている。本号のノート「親が勉強を教えている」は、このデータを使用した分析である。今後、本データの詳しい分析結果を順次レポートに掲載していく予定である。

本稿の構成は次のとおりである。次節では、調査概要を示す。3～6節は、学校教育、家庭教育に関する調査結果である。3節（執筆：宮木由貴子）では親による学校教育の現状への評価を、4節（殿村琴子）と5節（松田茂樹）では家庭教育の現状を、6節（的場康子）では小中学生の放課後の過ごし方についての結果を示す。7～9節は、子育ての現状を調査した結果である。7節（下関千春）では子どもの学校内外における悩みと病気への対処を、8節（北村安樹子）では祖父母の子育てへのかかわりを、9節（水野映子）では子どもにとっての自宅の安全性についての結果を示す。

2. 調査概要

本調査は、2007年3月に当研究所生活調査モニターのうち中学3年生までの子どもをもつ父母1,078組およびその子どものうち小学4年生～中学3年生までのもの（該当子が複数いる場合は最年長子のみ）567人に対して実施した。本人が自らアンケート票に記入することが難しいため、小学3年生までの子どもに対するアンケートは行っていない。調査概要は図表1のとおりである。

本調査の特徴は、同一世帯の父親、母親、子どもの3者に対して、それぞれアンケートを実施している点にある。3種類のアンケートの結果を分析することにより、子どもが通う学校の教育内容に対する父、母、子の意見の相違を比較することや、同一世帯における父母の教育へのかかわりと子どもの勉強時間の関係をみることなどが可能になる。

図表1 調査概要

調査名	子どもの生活に関するアンケート調査
調査対象	当研究所生活調査モニターのうち、中学3年生までの子どもをもつ父母1,078組およびその子どものうち小学4年生～中学3年生までのもの（該当子が複数いる場合は最年長子のみ）567人
有効回収数(率)	父親 927人 (86.0%) 母親 930人 (86.3%) 子ども 548人 (96.6%)
調査方法	郵送調査
調査時期	2007年3月

3. 学校教育と非教科教育に対する親子の認識

(1) 子どもの学年が上がるにつれて変化する学習環境評価

小学生と中学生の子どもをもつ父親と母親に対し、学校教育の評価に関する項目についてたずねた結果が図表2である。それぞれ左右のどちらの考えに近いかどうかをたずねたところ、「クラスの学習環境や雰囲気はよい」「成績の評価の仕方はよい、正当である」と考えている父親・母親が多かった。また、授業については「簡単である」と考えている父親・母親が多い。

父親・母親ともに子どもの学年が上がるにつれて、学校での学習環境に対する評価が変化しており、特に「先生の教え方」や「教え方の工夫」については、学年が上がるにつれて「教え方が上手」「工夫がある」が激減している。特に父親においては、他の回答に比べると「先生の教え方」や「教え方の工夫」について厳しい意見をもっている人が多い。

全体的に、左右の回答とも父親の回答は母親の回答を下回っているが、これは父親において「わからない」とする回答が母親に比べて2～4倍も多いことによるものである。すなわちこれは、父親が子どもの学校の様子を把握できていない実態を意味している（図表省略）。

図表2 子どもの学校での学習環境に対する父親・母親の評価(就学状況別)

子どもの就学状況		左側の考えに近い		右側の考えに近い		(単位：%)
		父親	母親	父親	母親	
小学1～3年生	授業が簡単である	30.5	42.0	0.6	3.1	授業が難しい
小学4～6年生		33.9	41.2	3.0	5.8	
中学生		21.6	25.4	12.7	17.8	
小学1～3年生	授業のペースが遅い	19.2	29.0	2.4	8.6	授業のペースが早い
小学4～6年生		24.6	32.5	4.7	11.5	
中学生		16.2	20.5	10.8	17.0	
小学1～3年生	先生の教え方が上手	21.0	37.0	10.2	12.3	先生の教え方が下手
小学4～6年生		10.2	27.6	12.7	18.9	
中学生		8.9	11.0	16.6	26.9	
小学1～3年生	教え方に工夫がある	21.0	41.4	8.4	15.4	教え方に工夫がない
小学4～6年生		12.7	23.9	11.0	22.2	
中学生		9.3	14.0	17.4	27.3	
小学1～3年生	クラスの学習環境や 雰囲気はよい	34.1	50.0	9.6	22.2	クラスの学習環境や 雰囲気は悪い
小学4～6年生		27.5	46.9	10.6	19.8	
中学生		29.0	44.3	13.9	21.2	
小学1～3年生	成績の評価の仕方は よい、正当である	36.5	43.8	3.6	11.7	成績の評価の仕方は よくない、正当でない
小学4～6年生		29.7	37.4	5.9	15.6	
中学生		29.7	34.5	15.1	20.8	

注1：小学1年生～中学生の子どもをもつ父親・母親の回答

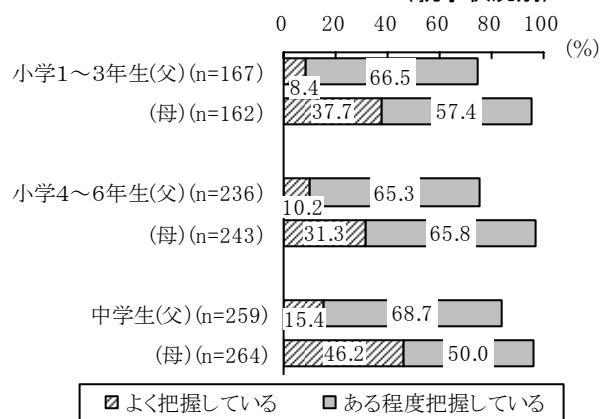
注2：「左側の考えに近い」「どちらかといえば左側の考えに近い」の合計と、「右側の考えに近い」「どちらかといえば左側の考えに近い」の合計（「どちらともいえない」「わからない」「無回答」を除く）

注3：小学1～3年生：父親 n=167/母親 n=162、小学4～6年生：父親 n=236/母親 n=243、中学生：父親 n=259/母親 n=264

親による子どもの成績の把握状況について、「よく把握している」と回答したのは母親で多く、特に

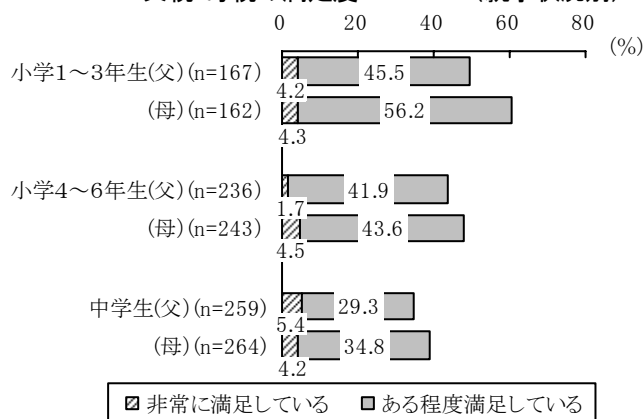
中学生の母親で「よく把握している」とした割合が高かった（図表3）。一方、学校教育における学習状況（成績や習熟度）に対する親の満足度は、子どもの学年が上がるにつれて低くなっている（図表4）。

図表3 子どもの成績に対する父親・母親の把握状況
（就学状況別）



注：小学1年生～中学生の子どもをもつ父親・母親の回答結果

図表4 学校教育における子どもの学習状況に対する父親・母親の満足度
（就学状況別）



注：小学1年生～中学生の子どもをもつ父親・母親の回答結果

(2) 親の意識は「多様性教育は学校で、食育は家庭で」

現行の教育制度上、教科として独立して設けられているケースの少ない社会的な教育について11項目をあげ、親の考え方についてたずねたところ、「多様性教育」や「職業教育」については学校で、「食育」や「保健教育」「コミュニケーション教育」といったものは家庭で教えるべきとの回答が多かった（図表5）。一方、これらに関する子どもの関心を尋ねたところ、「職業教育」「情報教育」、さらに親では意識の低かった「金融経済教育」への関心が高く、親側の意識とのギャップが散見された。

図表5 非教科教育に関する父親・母親・子どもの意識

（単位：%）

	教育の場				現状評価		子どもの関心
	学校で教えるべき		家庭で教えるべき		十分である+まあ十分である		とてもきょうみがある +まあきょうみがある
	父親	母親	父親	母親	父親	母親	
n=	684	686	684	686	684	686	548
1位	多様性教育 (53.5)	多様性教育 (53.6)	食育 (70.2)	食育 (75.9)	コミュニケーション教育 (49.3)	食育 (55.5)	職業教育 (80.3)
2位	環境教育 (48.4)	職業教育 (52.2)	保健教育 (46.8)	保健教育 (53.5)	食育 (48.7)	コミュニケーション教育 (53.4)	情報教育 (79.7)
3位	職業教育 (47.7)	環境教育 (48.8)	コミュニケーション教育 (45.2)	情報教育 (45.0)	環境教育 (35.5)	環境教育 (43.4)	金融経済教育 (75.7)
4位	保健教育 (38.3)	コミュニケーション教育 (36.9)	情報教育 (41.8)	コミュニケーション教育 (44.3)	情報教育 (32.7)	保健教育 (40.5)	コミュニケーション教育 (73.5)
5位	コミュニケーション教育 (34.1)	保健教育 (34.5)	消費者教育 (40.8)	消費者教育 (43.3)	保健教育 (32.6)	情報教育 (33.8)	食育 (72.6)

注1：小学1年生～中学生の子どもをもつ父親・母親と、小学4年生～中学生の子どもとの回答結果

注2：「多様性教育」は異文化、国際化、障害者、高齢者など／「環境教育」は3R（リユース・リデュース・リサイクル）やゴミ問題、環境問題など／「職業教育」は職種や業種について、職業選択、資格・専門性など／「保健教育」は生と死、病気、性、出産、子育てなど／「コミュニケーション教育」は人とのつきあい方、いじめ問題など／「食育」は食を食べることと生きること、飽食と飢餓、料理、食の安全など／「消費者教育」は購買、消費、悪徳商法など／「金融経済教育」は預貯金、投資、資産運用など（以上、親用調査票の表記方法、子ども用調査票は平易な表現に改めている）

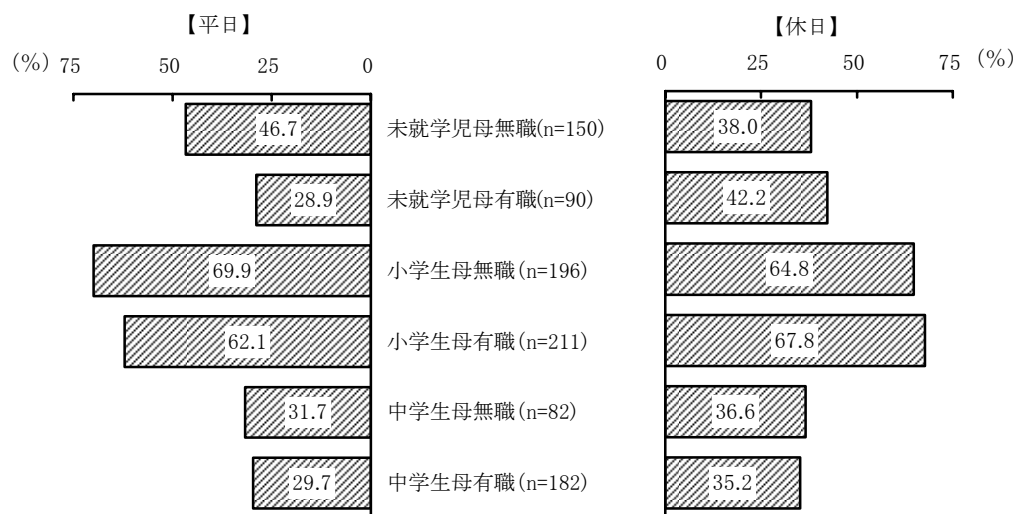
4. 子どもの学外における「学び」を支える環境と母親の就労

(1) 子どもの勉強をみる時間、有職の母親は休日にキャッチアップ？

中学3年生までの子どもをもつ母親に「子どもの勉強や宿題をみる時間」をたずねたところ、平日子どもの勉強をみる時間が1時間以上と答えた割合は、小学生の母親全体のほぼ3割にのぼる(図表省略)。また、近年の幼児教育熱を反映してか、未就学児でもほぼ4割の母親が、一日30分以上は子どもの勉強をみていると回答している。一日30分以上勉強をみる割合は、小学生で高く未就学児や中学生では低い。

母親の就労状況別にみると、小学生で「30分以上勉強をみる」割合は、平日には無職の母親の方が7.8ポイント上回るが、休日には有職の母親が3.0ポイント上回る(図表6)。有職の母親は、平日子どもの勉強を無職の母親ほどにはみられない分、休日にキャッチアップしようとしている様子がうかがえる。

図表6 母親が子どもの勉強や宿題を30分以上みる割合(就学状況・母親の就労状況別)



注：中学生までの子どもをもつ母親の回答結果

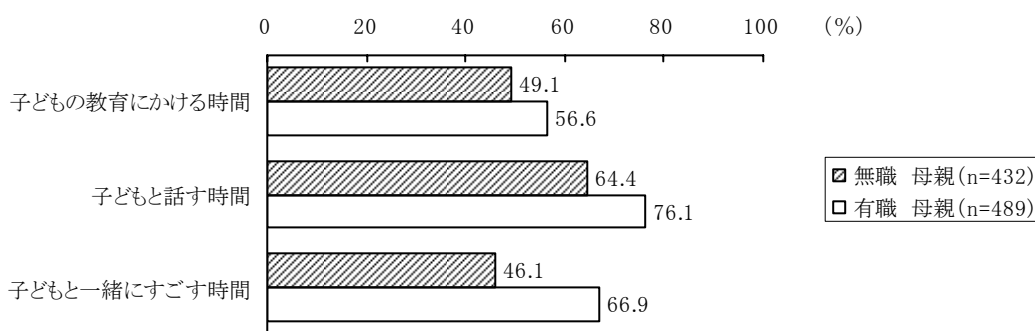
(2) 有職の母親の76.1%が「子どもと話す時間を増やしたい」

父親と母親それぞれに、自分自身や配偶者が子どもとかかわる時間についての希望をたずねたところ、「父親が子どもの教育にかける時間」については、父親、母親ともに6割以上、「父親が子どもと話す時間」や「父親が子どもと一緒に過ごす時間」については父親、母親ともに8割以上が「増やしたい(「増やしたい」、「どちらかといえば増やしたい」の合計、以下同様)」または「増やしてほしい(「増やしてほしい」、「どちらかといえば増やしてほしい」の合計、以下同様)」と回答している(図表省略)。

一方、「母親が子どもの教育にかける時間」については「増やしてほしい」とする父親は43.1%と半数を割るが、母親自身の52.9%が「増やしたい」としている。同じく、「母親が子どもと話す時間」や「母親が子どもと過ごす時間」についても、「増やしてほしい」とする父親は半数を下回るが、母親自身は、それぞれ70.5%、57.1%が「増やしたい」と感じており、母親の子どもへのかかわり方については、父親と母親との間に意識のギャップがあることがわかった。

これを母親の就労状況別にみると、「子どもの教育にかかる時間」、「子どもと話す時間」、「子どもと一緒に過ごす時間」の全てにおいて、有職の母親の方が無職の母親よりも、「増やしたい」と思う割合が高くなっている（図表7）。とりわけ、「子どもと話す時間」については、有職の母親の76.1%と4人のうち3人までが「増やしたい」と感じている。また、「子どもと一緒に過ごす時間」については、有職の母親の66.9%が増やしたいと感じており、無職の母親との差が20ポイント以上と3項目中最も大きかった。

図表7 母親が子どもとかかわる時間を増やしたいと思う割合（母親の就労状況別）

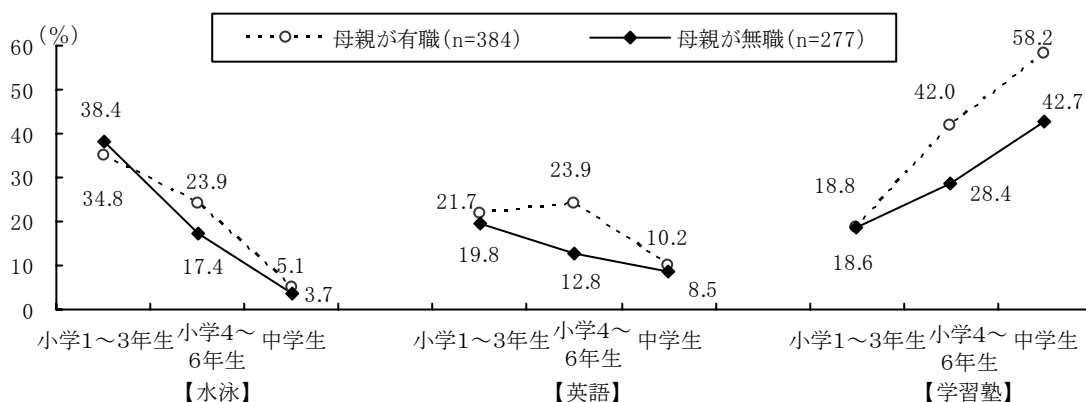


注：中学生までの子どもをもつ母親の回答結果

(3) 習い事や学習塾の利用割合は働く母親で高い

小中学生をもつ母親に、子どもの習い事や学習塾の利用状況についてたずねたところ、男女共に「水泳」、「英語」、「学習塾」の利用割合が比較的高いことがわかった（図表省略）。これを母親の就労状況別に比較すると、小学1～3年生ではあまり差がないが、小学4～6年生では英語と学習塾、中学生では学習塾の利用割合が、無職の母親より有職の母親で高いことがわかった（図表8）。

図表8 母親の就労と主な習い事・学習塾の利用割合（母親の就労状況別）



注：小学1年生～中学生の子どもをもつ母親の回答結果

5. 子どもからみた父親・母親のかかわり方

(1) 父母とも勉強プレッシャーよりも勉強サポートが多い

子どもに対して、父親・母親の自分へのかかわり方をたずねたところ、小学4～6年生の父親の約5割、母親の約9割、中学生の父親の約4割、母親の約6割が、子どもの勉強をみていることがわかった(図表9)。父親よりも母親の方が、子どもの勉強をみることが多い。また、多くの子どもが、父母が「私のことを大切にしてくれる」と回答している。

次に、子どもに勉強するように圧力をかける行動(勉強プレッシャー)と、子どもの勉強を支援する行動(勉強サポート)の2つの視点から、子どもに父親・母親の勉強へのかかわり方をたずねた結果が図表10である。父親・母親とも、総じて勉強プレッシャーよりも勉強サポートを行うことが多い。勉強サポートの項目についてみると、小学4～6年生の場合、「学校・勉強のことを気がるに話せる」父親は59.9%、母親は84.1%、「いい成績をとったときほめてくれる」父親は81.6%、母親は93.2%である。勉強プレッシャーの項目についてみると、小学4～6年生の場合、「勉強するようにやかましく言う」父親は24.6%、母親は59.4%、「テストの成績をチェックする」父親は34.4%、母親は79.7%である。小学4～6年生よりも中学生の方が、総じて父親・母親の勉強サポート行動が少なく、勉強プレッシャー行動が多いと感じている。

次に、父親・母親の勉強プレッシャーと勉強サポートの組み合わせをみてみたい。図表10には、勉強プレッシャーにあたる項目が4つ、勉強サポートにあたる項目が4つある。勉強プレッシャーにあたる4つの項目のうち、3つ以上を行っていれば、勉強プレッシャーが「強」、2つ以下であれば「弱」とする。同様に、勉強サポートについても、「強」「弱」を分ける。こうして作成した父親・母親の勉強へのかかわり方のタイプが図表11である。

母親についてみると、勉強プレッシャーも勉強サポートも強い者が約4割、勉強サポートのみ強い者も約4割いる。父親についてみると、勉強サポートのみ強い者が約5割で最も多く、次いで、勉強プレッシャーも勉強サポートも弱い者が約3割となっている。

父母とも、勉強プレッシャーのみ強い者は少ない。

図表9 父親・母親の子どもへのかかわり方(就学状況別)

	(単位: %)			
	小学4～6年生(n=207)		中学生(n=197)	
	父親	母親	父親	母親
勉強をみしてくれる	52.2	87.4	37.1	56.3
話の相手をしてくれる	76.8	96.6	70.6	90.4
私のことを大切にしてくれる	91.3	96.6	86.3	93.4
やさしい言葉をかけてくれる	73.4	87.9	73.1	83.8
困ったときに相談にのってくれる	69.1	91.3	67.0	82.7

注: 小学4年生～中学生の回答結果

図表10 父親・母親による子どもの勉強へのかかわり方(就学状況別)

(単位: %)

	小学4～6年生(n=207)		中学生(n=197)	
	父親	母親	父親	母親
【勉強プレッシャー】				
勉強するようにやかましく言う	24.6	59.4	28.4	59.9
テストの成績をチェックする	34.4	79.7	59.4	91.4
勉強のすすみぐあいを聞いてくる	32.9	66.2	34.0	56.9
勉強のしかたが悪いと言う	18.8	35.3	28.4	41.1
【勉強サポート】				
学校・勉強のことを気がるに話せる	59.9	84.1	54.3	79.2
私のことをいろいろと気にかける	67.1	88.9	73.6	87.3
私を信頼している	75.8	86.0	72.1	81.2
いい成績をとったときほめてくれる	81.6	93.2	79.7	84.8

注：小学4年生～中学生の回答結果

図表11 父親・母親の子どもの勉強へのかかわり方のタイプ

【父親】(n=403)		【母親】(n=402)	
サ ポ ー ト	勉強 強 弱	勉強 強 弱	勉強 強 弱
	弱 強	弱 強	弱 強
	53.5 12.4	42.6 42.3	
	28.9 5.0	7.4 7.2	
	勉強プレッシャー	勉強プレッシャー	

注：小学4年生～中学生の回答結果

(2) 父親・母親のかかわりは「いまでじゅうぶん」

子どもに対して、父親・母親にもっとしてほしいことをたずねた結果が図表12である。過半数の子どもが、勉強をみてもらうこと、話し相手をしてもらうこと、一緒にいることのいずれについても、「いまでじゅうぶん」と考えている。また、親に勉強をみてもらうことについては、小学4～6年生は、「もっとしてほしい」という回答も少なくない。しかし、中学生は逆であり、「あまりしてくれなくていい」という回答が多い。

図表12 父親・母親にもっとしてほしいこと(就学状況別)

(単位: %)

	小学4～6年生(n=207)			中学生(n=197)		
	もっと してほしい	いまで じゅうぶん	あまりして くれなくていい	もっと してほしい	いまで じゅうぶん	あまりして くれなくていい
お父さんに勉強をみてもらうこと	21.8	59.2	18.9	9.6	56.9	33.5
お父さんに話の相手をしてもらうこと	27.2	62.6	10.2	11.2	75.1	13.7
お父さんと一緒にいること	38.8	53.9	7.3	13.7	74.1	12.2
お母さんに勉強をみてもらうこと	25.7	66.0	8.3	7.6	60.9	31.5
お母さんに話の相手をしてもらうこと	31.6	65.5	2.9	12.7	78.7	8.6
お母さんと一緒にいること	36.9	60.7	2.4	12.2	81.7	6.1

注：小学4年生～中学生の回答結果

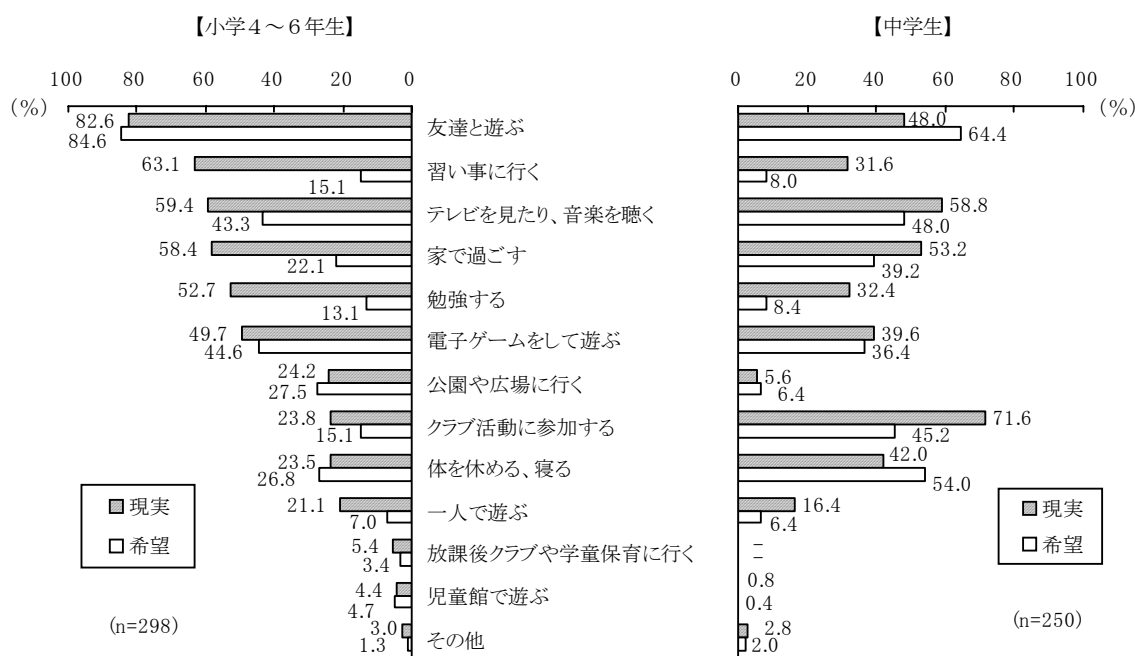
6. 小中学生の放課後の過ごし方と親の友人ネットワーク

(1) 放課後、小学生は「友達と遊ぶ」、中学生は「クラブ活動に参加する」

小中学生に対して、実際にどのように放課後を過ごしているか（現実）、また、どのように過ごしたいと思っているか（希望）をたずねた結果が図表13である。現実の過ごし方として、小学生は「友達と遊ぶ」、中学生は「クラブ活動に参加する」の回答割合が高い。

現実と希望との回答割合のギャップをみると、小中学生ともに「習い事に行く」と「勉強する」が、希望割合よりも現実割合のほうが20ポイント以上高い。

図表13 小中学生の放課後の過ごし方の現実と希望＜複数回答＞



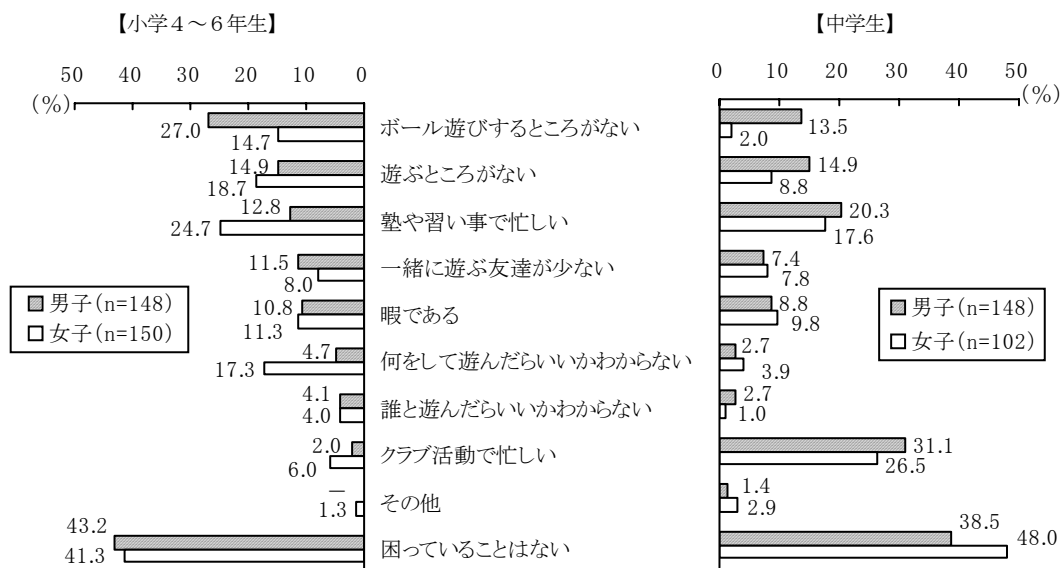
注：小学4年生～中学生の回答結果

(2) 放課後、困っていることとして、小学生男子の約3割が「ボール遊びをすることがない」

また、小中学生に対して、放課後生活で困っていることをたずねたところ、小中学生の男女ともに「困っていることはない」への回答が約4割を占めているが、それ以外の「困っている内容」を示した項目については、小中学生あるいは性別によって回答傾向が異なる（図表14）。

小学生の男子は「ボール遊びをすることがない」、女子は「塾や習い事で忙しい」への項目が第1位となっている。また、小学生女子の第2位は「遊ぶところがない」、第3位は「何をして遊んでいいかわからない」であり、いずれも約2割の回答割合である。中学生をみると、男女ともに「クラブ活動で忙しい」と「塾や習い事で忙しい」が上位2位までを占めている。

図表14 小中学生の放課後、困っていること(性別)＜複数回答＞



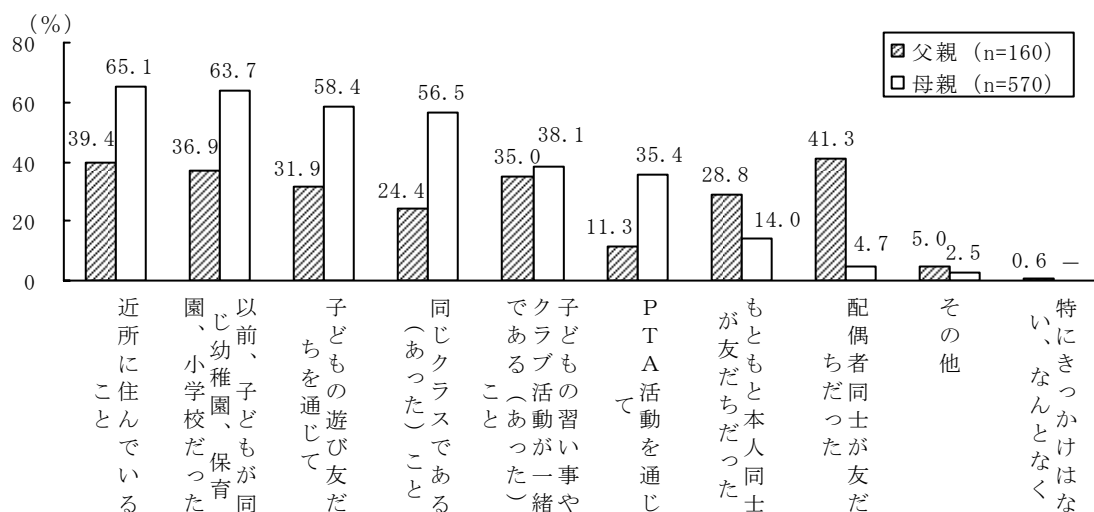
注：小学4年生～中学生の回答結果

(3) 子どもを通じた親同士の友人がいる割合 父親同士は24%、母親同士は84%

子どもを通じた親同士の友人で親しい人の有無を、小中学生のいる父母にたずねたところ、「いる」と回答した割合は、父親同士は23.8%、母親同士は83.9%であった（図表省略）。

子どもを通じた親同士の親しい友人が「いる」と回答した人に対して、「親しくなるきっかけ」をたずねたところ、母親は、子どもを通じたつきあいによって親しくなる人が多いのに対して、父親の場合は、子どもを通じて、というよりも配偶者を介して友人ネットワークを形成している人が多い（図表15）。

図表15 子どもを通じた親同士が親しくなるきっかけ(父親・母親別)＜複数回答＞



注：小学1年生～中学生の子どもをもつ父親・母親の回答結果
子どもを通じた親同士の友人で親しい人が「いる」と回答した人が対象

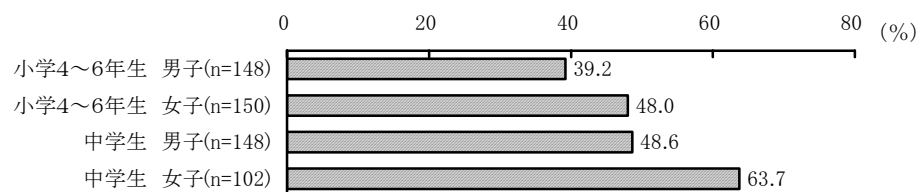
7. 子どもの悩みと病気への対処

(1) 小中学生の相談相手は母親中心

過去1年間に悩みや不満があったかどうか、小学4年生～中学生にたずねた。悩みや不満があったと答えた割合は、中学生では女子63.7%、男子48.6%、小学4～6年生では女子48.0%、男子39.2%となっている(図表16)。過去1年間の一番大きな悩みや不満は、中学生男子は「将来や進路のこと」(34.7%)、中学生女子は「友だちのこと」(29.2%)となっている(図表17)。小学4～6年生では、男女ともに「友だちのこと」(男子27.6%、女子40.3%)であった。小学4～6年生男子では、15.5%が「いじめ」を挙げている。

悩みや不満があったと答えた子どもに一番大きな悩みや不満について、だれかに話したり相談したかたずねた。だれかに相談した割合は、中学生女子(93.8%)、小学4～6年生女子(84.7%)、小学4～6年生男子(84.2%)、中学生男子(81.9%)の順となっている(図表省略)。相談相手は、「お母さん」(75.1%)が最も多く、「お父さん」(32.3%)はお母さんの半数に満たない(図表18)。

図表16 過去1年間に悩みや不満があった子どもの割合(就学状況、性別)



注：小学4年生～中学生の回答結果

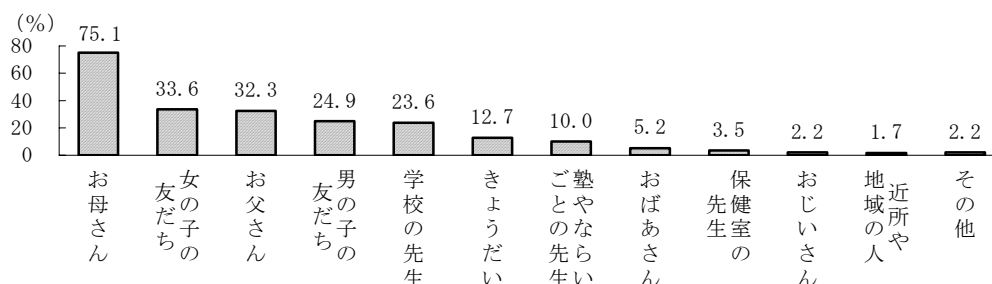
図表17 子どもの過去1年間の一番大きな悩みや不満(就学状況、性別)

(単位: %)

	小学4～6年生		中学生	
	男子(n=58)	女子(n=72)	男子(n=72)	女子(n=65)
友だちのこと	27.6	40.3	5.6	29.2
べんきょうのこと	22.4	16.7	18.1	21.5
いじめのこと	15.5	8.3	5.6	6.2
将来や進路のこと	12.1	4.2	34.7	15.4
かおやからだのこと	5.2	8.3	4.2	1.5
自分の性格やクセのこと	1.7	9.7	2.8	0.0
病気や健康のこと	5.2	4.2	2.8	0.0
家族のこと	1.7	2.8	2.8	0.0
恋愛、好きな人のこと	1.7	1.4	5.6	12.3
クラブ活動などのこと	1.7	0.0	13.9	9.2
その他	5.2	4.2	2.8	3.1
無回答	0.0	0.0	1.4	1.5

注：小学4年生～中学生で悩みや不満があったと答えた子どもの回答結果

図表18 子どもが過去1年間に悩みや不満の相談をした相手＜複数回答＞



注：小学4年生～中学生で悩みや不満があったと答えた子どもの回答結果

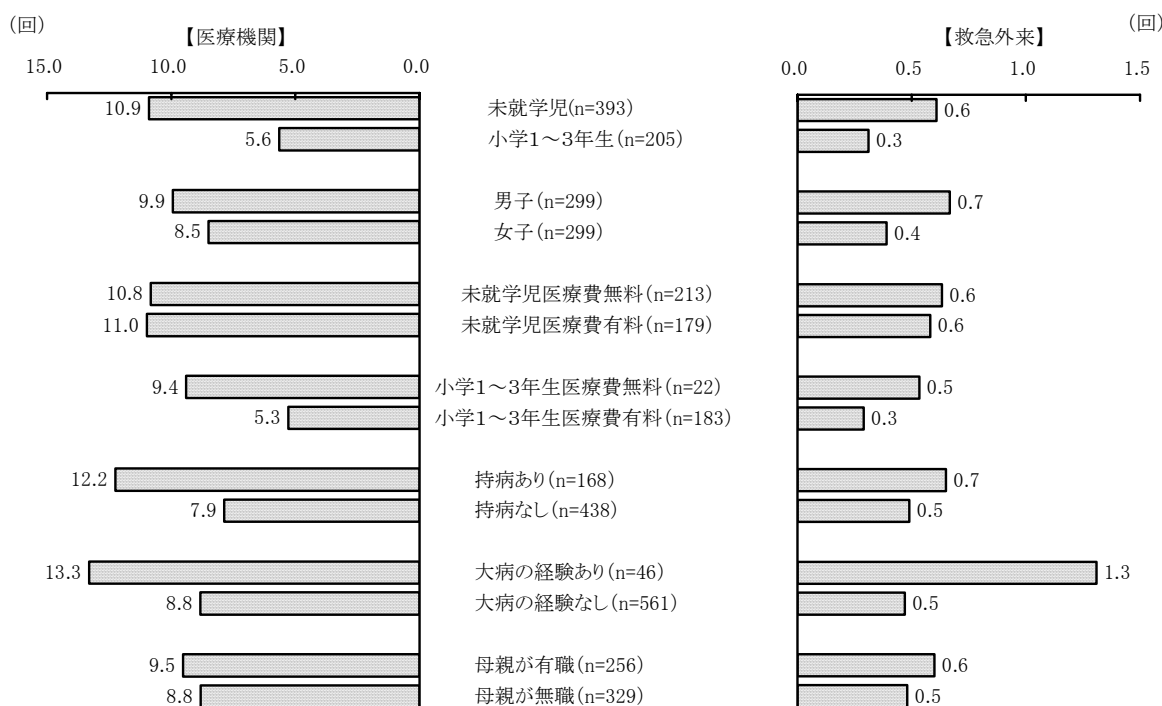
(2)医療機関の利用が多い理由は「子どもの持病あり」「子どもの大病経験あり」

過去1年間に、小学3年生以下の子どもで病気やけがのために医療機関を利用した回数を母親にたずねた。その結果は、5回未満（32.0%）、5～10回未満（28.8%）、10回以上（39.3%）となっており、全体平均は9.2回となった（図表省略）。平均すると1.3ヶ月に1回の頻度で利用していることになる。

過去1年間に医療機関の平均利用回数が多かったのは、子どもが未就学児、小学1～3年生で医療費が無料、子どもに持病や大病の経験がある場合となっている（図表19）。

これに対し、過去1年間の救急外来の利用回数は、0回（68.9%）が最も多く、1回が19.6%で、平均0.5回であった（図表省略）。就学状況別では未就学児（0.6回、小学1～3年生0.3回）、性別では男子（0.7回、女子0.4回）、子どもが大病をした経験がある場合（1.3回、経験なし0.5回）が多い。

図表19 子どもの過去1年間の医療機関・救急外来の平均利用回数



注：小学3年生までの子どもをもつ母親の回答結果、平均回数は無回答を除いて算出

8. 子育て、消費・余暇をめぐる世代間関係

(1) 母親の子育てを支える“祖父母力”

小学3年生までの子どもをもつ母親に子どもと会う機会が多い祖父母はどちらかをたずねたところ、「母方の祖父母」が64.1%、「父方の祖父母」が34.4%で、母方交流中心の母親が3分の2を占めた（他に「祖父母はいない」：0.8%、「無回答」：0.7%。以下は、交流が多い側の祖父母に関する回答結果）。

祖父母による子育て支援についてたずねたところ、母方交流中心、父方交流中心のいずれの母親でも支援を受けている割合が最も高かったのは「子どもの衣類、おもちゃ、学用品などを買ってもらう」（母方交流中心：84.4%、父方交流中心：71.9%）であった（図表20）。

これらの支援実態を祖父母に関する主な属性別に比較すると、祖父母が自宅から60分以内に居住し、祖父母の日常生活に経済面、時間面でのゆとりがあって、祖父母の健康状態がよい母親の方が、そうでない母親に比べてより多くの支援を受けている傾向がみられた（図表21）。

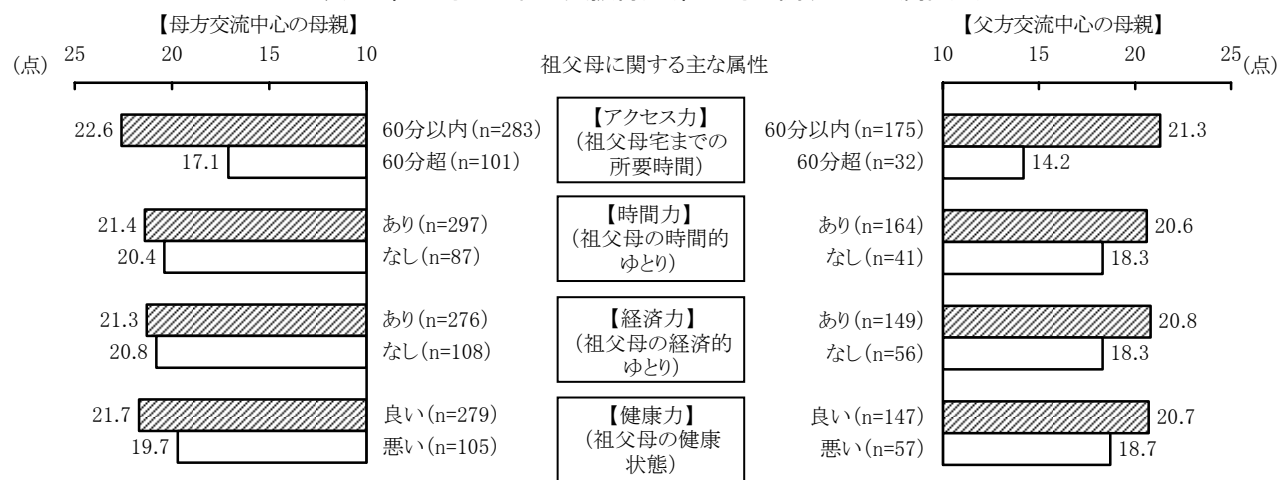
図表20 祖父母から受けている子育て支援(母方・父方別)

(単位:%)

	子どもの衣類・おもちゃ・学用品などを買ってもらう	子どもの病気や健康状態について相談する	数時間程度、子どもを預かってもらう(ふだん)	子どものしつけや教育について相談する	子どもの幼稚園・保育園・学校行事等に参加してもらう	数時間程度、子どもを預かってもらう(必要時)	子どもの幼稚園・保育園・学校等の送迎をしてもらう(必要時)	子どもの教育費に関する経済的支援を受ける	子どもの幼稚園・保育園・学校等の送迎をしてもらう(ふだん)	子どもの勉強や宿題をみてもらう
母方交流中心(n=391)	84.4	64.5	36.8	55.5	38.4	47.3	25.3	24.6	14.3	11.5
父方交流中心(n=210)	71.9	43.3	38.1	28.6	41.0	48.6	29.0	26.2	18.6	14.3

注：小学3年生までの子どもをもつ母親の回答結果（祖父母がいない人を除く）「よくある」「ときどきある」の合計

図表21 祖父母の子育て支援得点(祖父母に関する主な属性別)



注1：小学3年生までの子どもをもつ母親の回答結果（祖父母がいない人を除く）

注2：【アクセス力】：「60分以内」＝祖父母宅までの所要時間が60分以内／「なし」＝60分超、【時間力】：「あり」＝祖父母の日常生活に時間的ゆとりが「ある」「どちらかといえばある」／「なし」＝「ない」「どちらかといえばない」、【経済力】：「あり」＝祖父母の暮らし向きに経済的ゆとりが「ある」「どちらかといえばある」／「なし」：「ない」「どちらかといえばない」、【健康力】：「良い」＝祖父母の健康状態がともに「良い」「まあ良い」／「悪い」＝どちらかの祖父母の健康状態が「良くない」「あまり良くない」

注3：「子育て支援得点」とは、図表20の10項目についての回答で「よくある」「ときどきある」「あまりない」「まったくない」に各4～1点を与えて合計したもの

(2) 祖父母は三世代型消費・余暇のスポンサー

小学3年生までの子どもをもつ母親に祖父母と子どもを含む三世代での消費・余暇の実態についてたずねたところ、母方交流中心・父方交流中心のいずれの母親においても、経験者が最も多かったのは「外食（レストラン・喫茶店）」（母方交流中心：82.4%、父方交流中心：77.6%）であった（図表22）。2位以下には「買物（デパート・ショッピングセンター）」（同73.7%、60.0%）、「外出（海・山・川などへの日帰り旅行）」（同35.0%、28.1%）、「国内旅行（一泊以上）」（同32.2%、21.9%）などが続いている。

これらの経験を祖父母に関する主な属性別に比較すると、母方交流中心の母親では祖父母の属性とは無関係に三世代での消費・余暇を経験しているが、父方交流中心の母親では祖父母の経済的ゆとりの有無によって経験率が大きく異なり、祖父母に経済的ゆとりがない場合には三世代での消費・余暇経験がきわめて少ない（図表23）。

また、祖父母の属性にかかわらず、父方交流中心の母親では、母方交流中心の母親に比べて三世代での消費・余暇経験が大幅に少ない。

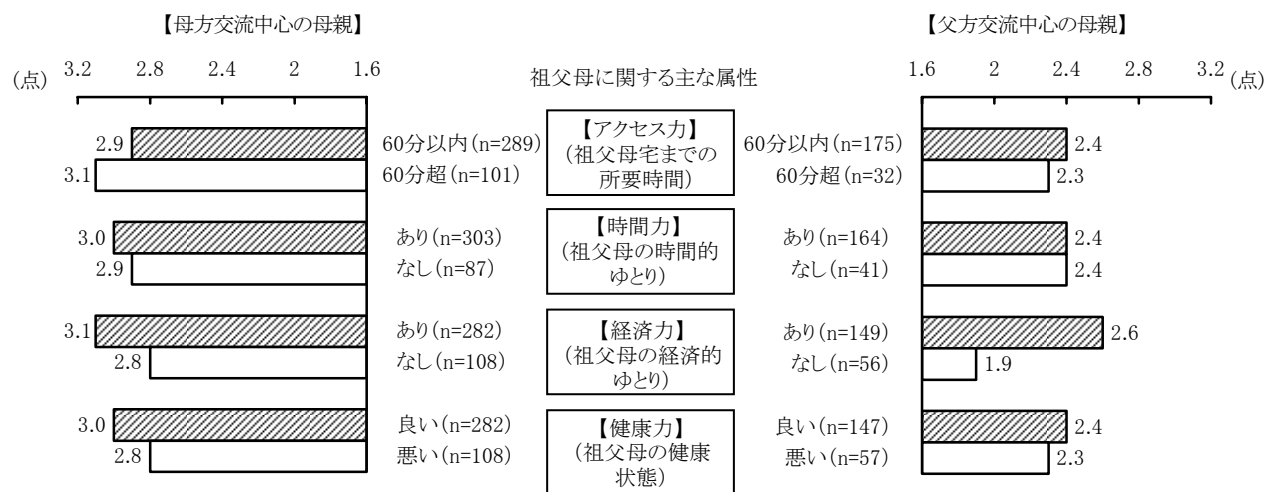
図表22 三世代での消費・余暇の経験(母方・父方別)＜複数回答＞

(単位: %)

	外食(レストラン、喫茶店)	買物(デパート・ショッピングセンター)	外出(海・山・川などへの日帰り旅行)	国内旅行(一泊以上)	外出(動物園、水族館)	外出(遊園地、テーマパーク)	外出(図書館、博物館、美術館)	外出(コンサート、観劇、映画鑑賞、スポーツ観戦)	海外旅行	特にない
母方交流中心の母親(n=391)	82.4	73.7	35.0	32.2	30.9	22.3	14.1	8.2	2.3	8.7
父方交流中心の母親(n=210)	77.6	60.0	28.1	21.9	21.4	16.2	8.1	5.2	0.5	12.9

注：小学3年生までの子どもをもつ母親の回答結果（祖父母がいない人を除く）

図表23 三世代での消費・余暇得点(祖父母に関する主な属性別)



注1：小学3年生までの子どもをもつ母親の回答結果（祖父母がいない人を除く）

注2：【アクセス力】、【時間力】、【経済力】、【健康力】の詳細は図表21の脚注を参照

注3：「消費・余暇得点」とは、図表22の「特にない」を除く9項目について、回答した場合に1点、回答しなかった場合に0点を与えて合計したもの

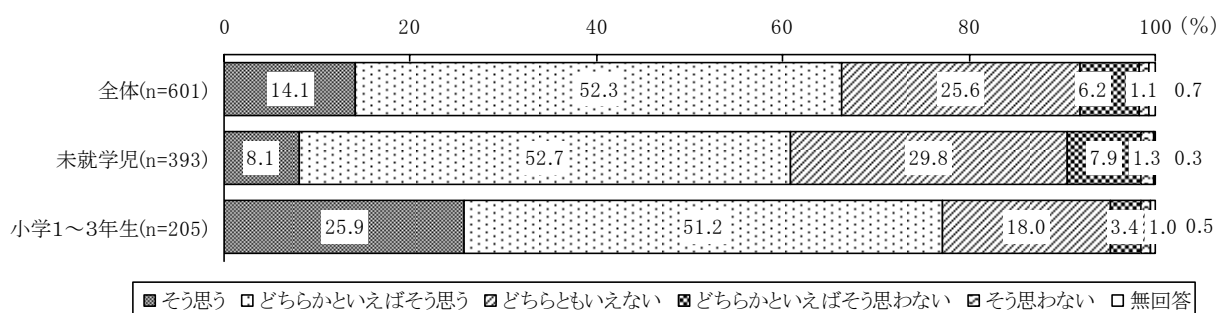
9. 子どもにとっての自宅の安全性

(1) 自宅が子どもにとって安全だと思う母親は3分の2

小学3年生までの子どもにとって自宅が安全だと思うかを母親にたずねたところ、安全だと「思う」（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）と答えた割合が、66.4%と約3分の2を占めた（図表24）。「どちらともいえない」と答えた割合は25.6%、「思わない」（「そう思う」＋「どちらかといえばそう思う」）と答えた割合は7.4%であった。

就学状況別にみると、安全だと「思う」割合は小学1～3年生の母親（77.1%）よりも未就学児の母親（60.8%）の方が16.3ポイント低かった。

図表24 自宅は安全だと思うか（就学状況別）



注：小学3年生までの子どもをもつ母親の回答結果

(2) 自宅での“ヒヤリ・ハット”体験は多い

子どもが自宅で経験した、あるいは経験しそうになった危険を母親にたずねたところ、「経験した」割合が過半数を占めたのは、「床や段差などで滑る・転ぶ・つまずく」（68.2%）、「柱や壁などにぶつかる」（54.8%）、「ドアや窓などで手をはさむ」（54.3%）であった（図表25）。また、「経験した」と「経験しそうになった」の合計割合は、「床や段差などで滑る・転ぶ・つまずく」（77.2%）と「ドアや窓などで手をはさむ」（76.4%）で、ともに4分の3を超えた。

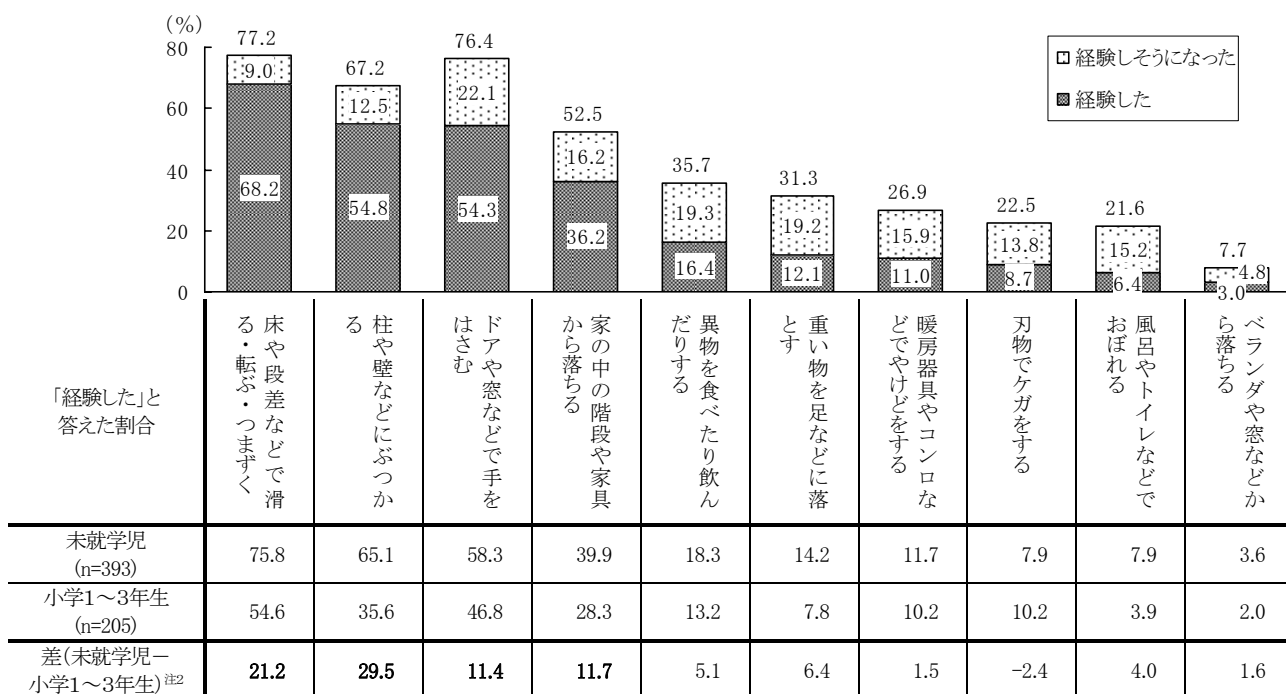
「経験した」と答えた割合を就学状況別にみると、小学1～3年生よりも未就学児の方が「刃物でケガをする」以外の割合はすべて高かった。特に差がある項目は、「柱や壁などにぶつかる」と「床や段差などで滑る・転ぶ・つまずく」であった。

(3) 子どもにとって危険な場所は浴室・ベランダ・台所・階段

子どもにとって危険があると感じる場所を母親にたずねたところ、危険があると感じる割合が3割を超えたのは、割合が高い順に「浴室」「ベランダ」「台所」「家の中の階段」であった（図表26）。「特にない」と答えた割合は24.4%であり、約4分の3の母親は自宅のどこかに子どもにとっての危険があると感じていることがわかる。

就学状況別では、小学1～3年生の母親に比べ未就学児の母親の方が、すべての場所において危険があると感じている割合が高かった。特に、未就学児の母親の4割前後は、「浴室」「台所」「ベランダ」「家の中の階段」で危険があると答えた。

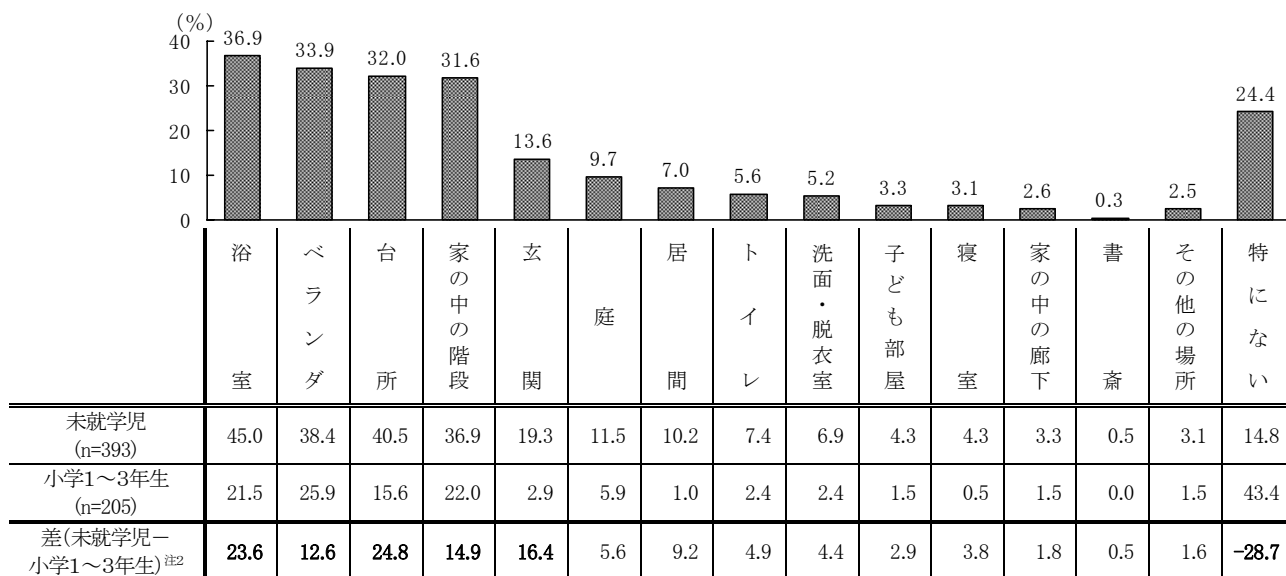
図表25 自宅で経験した・経験しそうになった危険(就学状況別)



注1：小学3年生までの子どもをもつ母親の回答結果

注2：未就学児と小学1～3年生との差が10ポイント以上の場合には太字で示した

図表26 自宅で危険があると感じる場所<複数回答>(就学状況別)



注1・2：図表25と同じ